

53年目の

「卒業50周年記念同窓会」

瀬田 勝男 (高22回)

細かった繋がり

ある時期、同窓会との関わりがほとんど切れていた。卒業20周年に参加した後、25周年には参加せず、15年ほどは何の活動にも参加していない。再度つながりを持たたのはメールグループに誘われたことで、パソコンの前には座れば情報が入って来る環境で兎にも角にも面倒くさからずにつながりを継続できた。

その中で、関東の22回生で集まっているという誘いを受け、初めて参加したのは50歳を過ぎて勤務地が東京になった頃だったと思う。今となっては何処の飲み屋だったか記憶が曖昧だが、東京のどこかで、何人かははつきり覚えていたメンバーを含め、全体で15名ほどの同期生とあれこれ久しぶりに飲んで話した。

その後四谷の某法律事務所で開催されていた芋煮会に



●せた・かつお
飯田西中出身。名古屋大学大学院(原子核工学専攻)修了後、計量研究所で光計測の研究と長さの計量標準を担当。(独)製品評価技術基盤機構(NITE)に異動し、試験所認定機関を運営、定年退職。

参加するようになり、焼津、スカイツリー、といった22回生全体の行事にも参加するようになってきた。また、2回ほどつくばでの研究施設見学会をお世話させて頂いた。関東在住者中心の集まりではあったが、飯田から参加いただいたこともあってこれは嬉しかった。

私のこの経緯を振り返ると、メールグループが無ければ、今頃は住所不明扱いのメンバーだったかもしれないと思う。メールグループから芋煮会のラインで今回の同窓会までつながりとして頂いた方々には感謝しかない。

久々の帰郷、同期展

2023年4月15日に同窓会出席のため、久しぶりに帰省した。既に5年以上は帰っていないがコロナが理由では無い。実家を整理し、暮は現在の居住地、茨城県つくばの近くに移したので、姉に会う以外に帰省する

用事も無くなった。さらにつくばに引き取った母の存命中は姉がつくばへ来るのが普通だったので、既に帰省機会はほぼ無くなっていった。今回は16時新宿発のバスを使い、20時くらいに伊賀良インターのバス停に着いた。

このバス停を出て旧市街地へ向かう際に既に違和感があり、バスの道順というより、道路自体が随分変化したと感じた。飯田駅前は一ひっそりと静かで、記憶の中の駅前に比べれば随分と寂しい。昔は駅付近で少なくとも4か所は喫茶店があったと思うが、今回はバス停向かいの1つしか見つけられなかった。これからの飯田は縮小する前提で考えないといけないだろうが、その時期にリア開通への対応も必要となつて、随分と悩ましい時期かもしれない。

16日の朝、姉の家を訪ねた後、飯田創造館での同期展に向かった。「旧風越高校跡地」という知識はあったのだが、それがかえって災いして少し迷った。記憶の中の風越高校は、通学時に見た校門と、文化祭の時に訪問したことのみで、それは桜町から銀座へ続く表通りから見え、そこから入ったという記憶になる。ところが飯田創造館はそれよりはかなり奥まった場所にあり、Google Mapが無ければもう少し迷っていたかもしれない。記憶の中の風越高校は表側の一部だけだったのだと理解した。

同期展会場になんとかたどり着き、展示を行っている同期生をはじめ懐かしい人たちが何名かと会えた。それにしては絵画、写真など見ごたえのあるものが相当数展示されており、予想をかなり超えていた。23名の作品というのだが、これほど多くのメンバーがこれだけの作品を展示する技量があるということは素直に感心する。400名いたという数の力があるにしても、20人に1人以上がそれぞれの表現で展示できる作品を作っていることにな

る。特に写真はとつきやすいのかもしれないが、10名もの方々がそれなりの水準のものを展示しているのには少し驚いた。これを一通り見て、そこで出会った中学からの友人と昼食へ、ラーメンを食してから会場のビークラスマツカワへ向かった。



「同期展」でのギャラリートーク＝飯田創造館にて

祝賀会でのやり取りと小旅行

人見知りする性質ではあるので、祝賀会のテーブル分がクラスごとなのは有り難かった。D組の15名とは敷居が一段と低くて話しやすかった。当日は高校の頃以上に親しく話せた相手もいた。同級生は話し始めればすぐに昔の高校生同士で話している感覚になり、姿かたちも若い時分の相手に話している気分になれる。

今、3週間後の時点で思い返しても、祝賀会の当日に、ほとんど高校生当時の若い相手と話したような記憶になつているのが面白い。その一方で、他のクラスの人と話す機会は少なく、誰だったか思い出せないままの方も少なくなかったが、これは自分の性格によるものなので仕方無い。やはり高校時代にある程度以上の付き合いがあった同士は打ち解けやすいが顔と名前をその当時に覚えていなかった相手とは難しく、昔の顔を思い出せないで目の前にいる気難しいかもしれない老人、となってしまう。こう考えると、ほとんどの顔と名前が一致して話せる、という人は結構な財産をもっているものだと思う。

いくつかの会話の中で、印象に残っていることが2つある。1つはD組が「悲しき雨音」の合奏をやったのは

2年生の時か3年生の時かと聞かれたことで、私には2年生の時にやったというかなり鮮明な記憶があるのに、それが曖昧な人もいれば3年生の時と思い込んでいる人もいるというのにはちょっと驚いた。

でも、考えればそれが当たり前で、私にとっては、「それなりに自分も頑張った楽しい思い出」で記憶が残り易かったのだろうが、それほど印象が無かった人も少なくは無いだろう。もう1つは、D組外の中学の同級生に話しかけた時に「昔は暗い印象だったが随分明るくなつた」と言われたことで、中学までの過ごし方がまずくて残念だったという少し悔しい思いと、高校からの人生はそれなりに良かった、良くすることができたのだなという少々の自信という、2つの感情を持った。

17日の小旅行は35名が参加したとのこと、D組の3名はともかく、その他のメンバーは顔と名前が一致するメンバーがむしろ少ない。数名は確認できたが、半分以上は誰だかわからない状態のまま終わってしまった。昼食時にでも「お前は誰だ」と聞く度胸と積極性があれば良かったのだが無いものねだりしても仕方ない。ただ、それを差し引いても、小旅行の企画立案実施内容が秀逸であり、私にとってはDiscover故郷の楽しい旅となった。私は地元での土地勘は乏しく、人脈もほとんど持って

おらず、そもそも高校卒業まで地元への愛着も興味も大して無かったので、今回初めて知ったことが多かった。

終わってみたい

53年目の50周年記念同窓会、済んでしまえばあつという間で、メールでやり取りされているようにロス状態にもなった。とは言え、いつもの日常がまた始まり、5月に入って流石にロス状態からは脱却しつつある。

16日の記念式典・祝賀会の始めにこれまでの物故者38名とのお知らせと彼らへの黙祷があった。3年前に開催できていれば参加できたかもしれないD組の同級生が2名、何か悔しい。私にとっては最も親しかった友人と、22回生グループメールでつい最近やり取りのあった友人



小旅行で訪れた「そらさんぼ天龍峡」

の2人だったので、ことさらその思いが強い。その一方で、3年前に普通に実施できていたら、「これが最後」という感覚はずっと乏しかったかもしれない。「会えなかった2人」がいたことで、自身の生き死にを考えさせられもし、こういう会に参加できた自分が幸せで恵まれた存在だという肯定感が大きくなった面はある。

後日考えたことの第一は、自分を知って、見てくれる存在の有難さで、高校の同期生がこれだけの質と量でこのようなつながりを持っていることはお互いに何とも幸せなことだと思う。周囲を見ても高校の同窓会でこれだけの付き合いがある人を他に知らない。人間の避けられない宿命で、今後は同窓会メンバーも徐々に欠けていくのだろうが、それまで、お互いの存在を認め合って過ごしたいと強く感じた。今回の集まりは、この規模でできる最後になることは確かだろうと思う。これに参加できたのはありがたいことだったし、実現してくれた役員の方々には改めてお礼を言いたい。

この会の前後に、同窓会への気持ちの後押ししたこともあり、妻に勧められていた地域の老人クラブに加入した。早速ギター同好会に入って隔月の誕生日会で演奏にも参加、今後の他人との関わりを豊かにする一助にした。